

女子部・男子部

新たに始まった教科「TLP」

全学教諭（キリスト教）後藤田典子

創立100周年を機に始まった三つの教科、「共生」「探求」そして「TLP」。「TLP」は、未知の領域へ発展していく二つの教科とは対象的に現在に至る過去からの積み重ねられた歴史を掘り下げ、自分自身と共同体が「どこから生まれ来てどこへ向かって行くのか」思いを馳せつつ、真の自由を目指す教科である。中等科から始められた授業は、本学園の土台となるキリスト教・聖書とそこから導かれた創立者の建学の願いを受けとめる内容で展開し、三年かけて高等科へ広げる計画である。さらに学部で行われている「自由学原論」などに繋げていく構想も持っている。

I. はじめに

キリスト教に基づく教育を願い求めた理事長・学園長から、聖書の授業をするよう筆者が依頼を受けたのは、2020年(令和2年)の晩秋。2021年(令和3年)春の開講まで3カ月余りでの準備は、地方の前任教での務めの傍ら行われた。コロナ禍対応の厳しい状況下でもあり、十分に学園の現状把握ができないまま、これまでの経験と今できる事を基に開始することになった。学園創立時もわずか数カ月の準備期間で開学した学園である。前向きな創立者の姿勢に力づけられ、新教科のスタートは切られた。

以下は、その春に書いた「TLP」の紹介文である。

新しく始まった教科は、一略 創立者の建学の願いを受け継ぎながら、創立者を支え導いた聖書そのものも学び、学園生活で得る知識や技術・経験を活かして自由人に近づくことを、さらに巣立った後も「真の自由人」になっていくことをねらいとしています。

キリストをただ一人の先生とする学校として、これまでも学園では毎朝の礼拝が行われてきました。読まれた聖書の言葉は日々の学園の生活を支え、一人ひとりの心に刻まれています。また、創立者が天に召された後も羽仁両先生の著作を読む「読書」の授業が行われ、成長の過程に応じて創立者の言葉を蓄え、学校・寮・家庭などの具体的な場面に反映させながら生活の指針としてきたのでした。多くの伝統校で創立者の理念が薄れている昨今、子どもにも親しみやすい数々の著作は時代を超えた説得力と指導力を持って学ぶ者を養ってきました。とは言え、目覚ましい科学技術の進展とそれに伴う情報化社会に変化した現代は、無限

の可能性を私達人間に示しつつ、同時に限りある生命や資源の現実を示しており、広く社会に関わる人の役割・その担い方も多様化してきました。そのような時の流れの中で、社会・世界を広く確かに見渡す力と一個人として謙虚に地に足を着けて暮らす力は、長い生涯を通して養い続けねばならないでしょう。だからこそ、自由学園はキリストに示される真理を伝える聖書を体系的に把握し、生きる指針となる価値観・人生観の土台を築くことが重要であると考えています。「TLP」は、生徒たちがどのような年代を迎えても立ち帰る原点を若き日に据えて、その上に幅広く多面的な学びや経験を構築していけるように、と始められた教科なのです。

中等科3学年で一斉に始まった授業は、1年生が聖書全体のおよその内容(聖書の構成を知り神と人との関わり・人と人との関わりをテーマに読む)を、2年生は旧約聖書の主だった箇所(天地創造に始まる歴史の流れを中心に神の願いを読む)を学んでいます。3年生は新約聖書の主イエス・キリストの記録(福音書)と弟子達の活躍の記録(使徒言行録・書簡)から、どのような人も罪が ^{あがな} 贖われ自由な人とならせていただける信仰を読み取っていきます。これらの学習には多くのキリスト教学校で行われている「聖書科」の内容が盛り込まれています。同時に、1年生は「子ども読本」、2年生は「自由・協力・愛」や「思想しつつ生活しつつ(下)」、3年生は「みどりごの心」といった羽仁もと子先生の著書にも触れて、これまで続けられてきた「読書」の授業も活かされるように工夫しています。今後は高等科へと拡がる予定で、学部の「自由学原論」にも通じていくでしょう。

これからも自由学園は「真理は汝らに自由を得さすべし。」(文語訳聖書・ヨハネ8:32)を指針に進みます。基礎基本を学ぶ「TLP」そのものが、子どもたちの学校生活の中で、さらに卒業した後も自由に大らかに形成されていくように、まさに常に「・・・つつ」との現在進行形であり続けるよう励んでいます。

(「学園新聞」2021年8・9・10月号)

II. 実践の概要

1. 授業開始の準備

中等科から始まる授業は週1回開講。女子部男子部各1クラスの計6時間なので、全クラスを筆者が担当する予定で授業計画を立て、教材準備を行った。

女子部から星住リベカ先生、男子部から内藤優子先生、両名のサポーターを得て生徒たちの様子や学校生活の流れを伺い、授業内容の予定・教材(聖書とノートのみ・教科書は不使用)等を相談。女子部では最初の教師会で授業予定の説明を行い(男子部では結果的にできなかった)、3学年6クラスが一斉に始められた。クラス担任には可能な範囲で授業見学を勧めた。

以降、初年度はこの二名と月1、2回の相談する時間を持ち進めることになった。(教科担当者は筆者一名なので教科会ではなく相談・進行の会とし、決議事項などがある場合等、必要に応じて学園長等も参加する性格とした。)

2. 2021年度(初年)について

(1) 授業内容 (中等科3学年)

1年 福音書を中心にイエス・キリストの教えを学ぶ

愛の宗教と言われるキリスト教

キリストに学んだ弟子としての羽仁もと子

2年 旧約聖書から創られた「人」、神の導きを学ぶ

奴隷から自由人へ(学園の校歌の背景)

「教育三十年」を基に考える(内藤先生担当)

3年 福音書を中心にイエス・キリストの教えを学ぶ

聖書の歴史観(過去・現在・未来)

神の愛を受け、神を愛し隣人を愛す

特記事項:1学期の途中で、これまで行われ来た「読書」の授業の継続を要望する先生方からの助言を受け、2学期以降に各学年に応じた授業時間を設ける事を計画(コロナ禍の影響を受け、実際には計画通りにはいかなかった部分があった)。

(2) 成績評価 (中等科3学年)

文章表記の評価

(3) 教科としての振り返り

クラス差への配慮、読書の授業を年度始めから企画するようにする。(教科会ではないが、星住・内藤両先生の協力を得て月1回程度の話し合いを実施)

3. 2022年度(2年目)について

(1) 授業内容 (中等科3学年・高等科1年)

[中]1年 自由学園に学ぶということ

キリスト教とは(礼拝・祈り・聖書、愛・いのち)

主イエスの生涯と教え

2年 自由学園に学ぶということ

キリスト教とは(礼拝・祈り・聖書、愛・いのち)

新約聖書・主イエスの教え(愛・赦し)

旧約聖書・神の導き(再出発のチャンス)

学園の歴史・残された文章を読む

3年 自由学園に学ぶということ

キリスト教とは(礼拝・祈り・聖書、愛・いのち)

主イエスが示した十字架と復活・生きる

学園の歴史・残された文章を読む

[高]1年 自由学園に学ぶ・聖書に学ぶとは

聖書・人・自由・過去から現在、未来へ

「教育三十年」を読む

副読本 中「キリスト教入門」キリスト教学校教育同盟編

高「旧約聖書」日本基督教団出版局

(2) 成績評価

中等科 文章表記の評価

高等科 絶対評価による5段階評価

(3) 教科としての振り返り

読書部分を担当された先生方からの苦労・工夫、コロナ禍対応に即し再開され始めた行事等を考え、次年度から授業を半期(前期・後期)にし、「キリストを知る」「自由学園を知る」の領域を学ぶよう変更する。(学園長、竹上先生・内藤先生・角田先生・近藤先生等の協力を得て、学期に2、3回程度の話し合いを実施)。

次年度から、教科会として機能を果たせるようにメンバーを確定し、オープンにしつつも会議で協議・審議・決議ができるようにする。

III. 補足的な事柄

1. 教科名

羽仁もと子の言葉「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」の英語訳の頭文字で命名。広くキリスト教学校では「聖書科」「宗教科」との教科名となっており、教育基本法改正後もこの教科が義務教育課程の道徳の読み替えに認められている。が、本学園では、建学の精神の学びにも重点を置きたく、教科のねらいとしては道徳に充足できると判断し、私学の教育の独自性を活かした教科名となった。

2. 担当者選定の経緯

初年度は、本学園の卒業生(独特な教育を行う学園への理解)であり、創立者との関わりが深い富士見町教会(日本基督教団)との繋がり、キリスト教学校(キリスト教教育同盟所属校)で30年程働いた経験といった理由で、筆者が招聘された。その際、一般的にキリスト教学校でみられる宗教主事・宗教主任・チャプレンといった役職を現段階で設置するのは難しいため、冒頭のような立場の表現になっている。なお、学園が日本基督教団の関係校ではないので、筆者は教務教師ではなく無任所教師の登録とした。

今回、初めて専任のキリスト教教育担当者(宗教科教員免許を持つ牧師)を置いた学園だが、今後、教会(教団・教派)との関係の持ち方や、担当者の思想・神学的背景には十分な注意と吟味が必要と考える。

IV. 終わりに

これまで他のキリスト教学校で30年程聖書科授業を行ってきた経験から、この教科は単に聖書を読むだけでなく、自分を語り隣人に聞く「ことば」を獲得し、明確には見えない未来にも関わらず見つめていこうとする力が養われると実感させられてならない。この観点から見ると、学園ではこのような授業が行われてこなかったからか、聖書やキリスト教に対する知識と共に、体系的に全体的に把握する力や思考力が弱いと感じる。学園の教育を支える聖書の言葉がそれぞれの個人の主観による受けとめ・表現に留まっており、クラスや学校の全体を形成する思想に至る以前に消費されているようで、大変勿体ない。

しばしば生徒からも教職員からも「日々の生活の中から読む」「生活に根付く聖書」という言葉を耳にするのだが、それは学校生活の中でどのように現れているのだろう。聖書やキリスト教そのものを学ばない言い訳になってしまうなら、キリストただお一人を先生とする、と言われた創立者の

建学の思いから離れてしまわないか。

いわゆるキリスト教学校は、学校を生み出した教会に支えられ祈られている。学園は、教会(教団・教派)に依存せず自主独立に歩んできたユニークさがある。そのユニークさを重んじ続けるためにも、自らしっかり立ち、よく祈りつつ、聖書を土台とする学校として歩まねばならないだろう。長く教会と相互依存するキリスト教学校で学校形成に励んできた筆者の見解である。

「TLP」という教科は、生徒にとっては週一回の一授業だが、毎朝の礼拝・日々の学校生活とは切り離す事ができない特殊性がある。礼拝・学校生活(行事や諸活動)との繋がりの中で授業内容を受けとめ、個々の聖書の読解力を高め、同時にクラスや学校全体で共有していく繋がり合う力を培うようでありたい。

「思想しつつ 生活しつつ 祈りつつ」創立者の建学の精神を尋ね求め続ける学園でありますように。